我が署と地域社会のかかわり

付知営林署　業務課　造林係　　林　田　勇　貴

1　はじめに

これまで営林署と地域社会とのかかわりといえば、一言で言って受け身の体制だったと言えます。

しかし、地域社会の厳しい目が向けられる現在、営林署がこれまで通りの対応を続ければ、地域から孤立し、支持を失うことは明らかです。「この町に営林署があって良かった」と地域の人々から言われるためにはどうあるべきか、我が署では地元の製材業者などで構成される「旧塞の神トンネル利用木材乾燥研究会」に参加し、活動してきましたのでその経過を報告します。

2　経　緯

平成７年７月恵那郡付知町と恵那郡加子母村にまたがる「新塞の神トンネル」の完成に伴い、役目を終えた「旧塞の神トンネル」を町興しに活かしたいと両町村で再利用のアイデアの募集がありました。そこで地元の商工会青年部からは、味噌・醤油・ワイン・地酒等の貯蔵庫、映画館、野菜の保存庫等に利用したらどうかとの案が出されました。

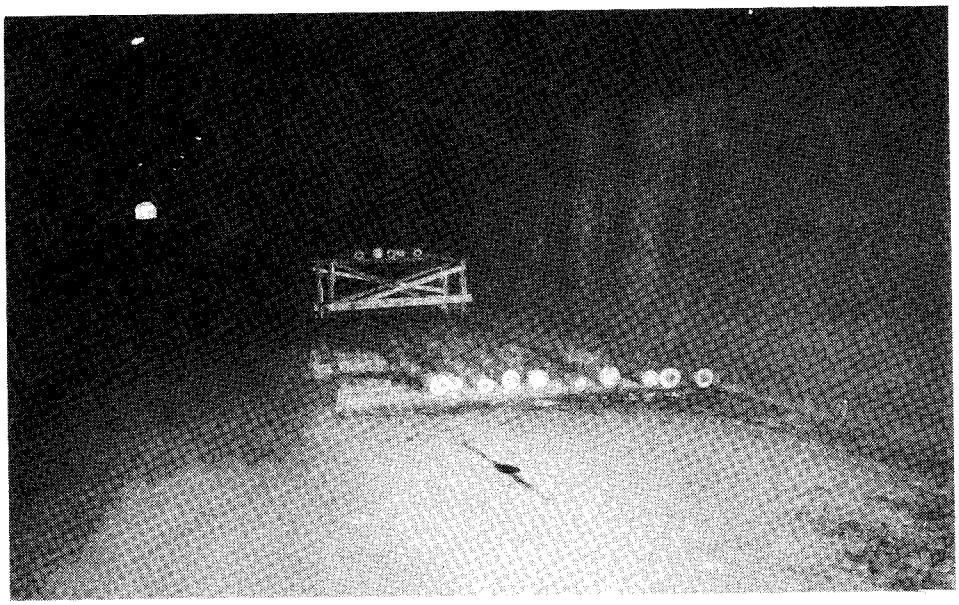
また、中川前付知営林署長から「東濃ヒノキ」発祥の地であるこの地域は、林業が盛んであり製材業者も多くいることから「トンネルを利用し木材乾燥を」とのアイディアを出したところ採用されることになりました。

3　トンネルの概要

旧塞の神トンネルは昭和40年に開通し、平成７年に新しいトンネルが開通するまで約30年間使用され、延長は461ｍ・幅員６ｍ・高さ5.26ｍ・勾配2.16％でコンクリート塗装が施されています。

試験木は全て営林署より提供し、その内訳はスギ26本・ヒノキ32本、計58本で全て３ｍに造材し、トンネル内に３箇所に分けて設置しました。それらはいずれも枕木を置き、トンネルと木材とを平行にして設置しました。

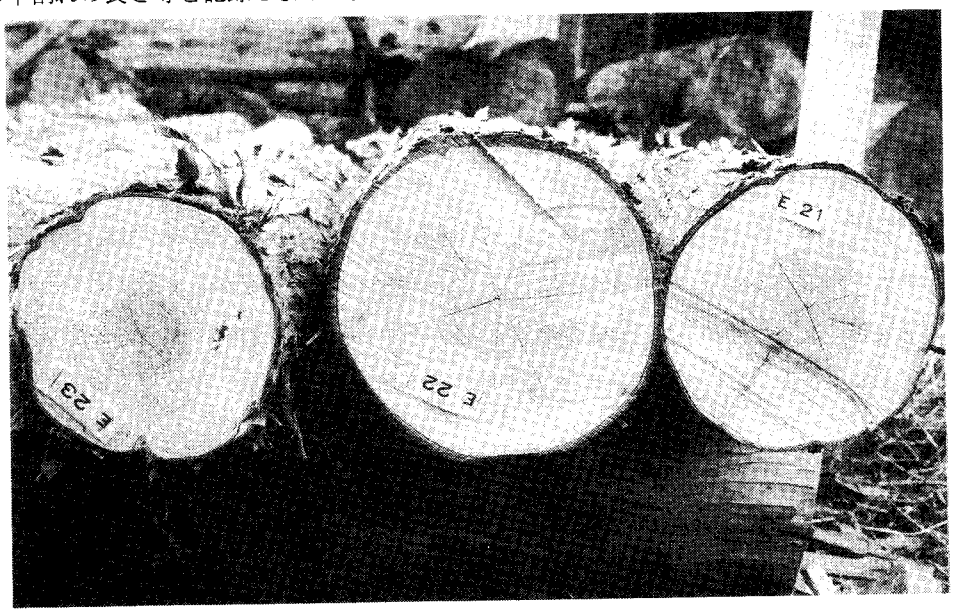
一方、トンネル内の木材との比較のため、木材業者の土場にスギ４本、ヒノキ６本、営林署の土場にスギ８本、ヒノキ10本をトンネル内と同様の方法で並べ、比較することとしました。



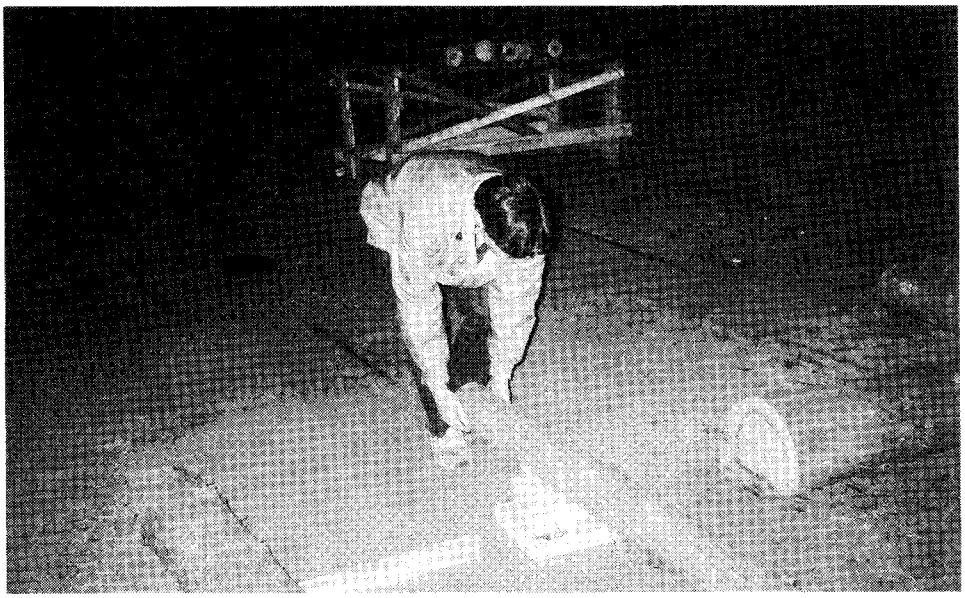
トンネル内に設置した丸太の状況

4　調査内容

調査は月１回の割合で行い、調査項目は、温度・湿度・重量・小口割れの４項目としました。温度、湿度は「デジタル温湿度計」を使用し計測しました。重量は１本１本両小口の重さを計り、その合計を木材の重量としました。小口割れは両小口の干割れの状況を写真撮影し、小口面に対する干割れの長さ等を記録しました。



小口の干割れ



調査風景

5　結　果

それらの結果については、随時開催される「旧塞の神トンネル利用木材乾燥研究会」の場で報告し、意見を交わす中から次への方向付けをしていきました。その結果、トンネル内での自然乾燥では十分な効果が得られない事や、カビなどが繁殖してしまい、材としての利用が困難なこと等を理由に、カビを防ぎ、ダニ等の害虫を寄せ付けず、また耐久性にも優れた材を作る「燻煙乾燥」を指向していくことで検討しています。

6　最後に

こうした地域で行われる研究会に参加する中で、地元の人たちの営林署に対する関心が徐々に高まり、営林署への要望も多くなってきたように感じました。これらの地域の要望に応え、現在、営林署の置かれている厳しい立場を理解してもらい、地域の人々の目が営林署に向くような努力が必要だと思います。そのためには、営林署の職員が減少する中ではありますが、今後とも職員一人一人が知恵を出し合い、積極的に地域社会の中へ飛び込んで活動していく必要があると思います。